

はじめに

本書ではカズオ・イシグロの作品群の全体像を理解するために、各作品に登場する主要なモチーフに着目しながら作品を読み解いてゆく。我々がイシグロの作品を読み進めてゆくうちにしばしば感じるのは、「この話、別の作品でも読んだ気がする」という感覚ではないだろうか。たしかに、彼の小説では類似したテーマや題材、モチーフがしばしば反復および変奏され、初めて読む作品であっても読者にこうした奇妙な既視感と同時に穏やかな親近感も与え、その作品世界へと導いてくれる。それはともすれば、自己模倣だという性急な批判の格好の餌食ともなりうるのだが、むしろイシグロがデビュー当初から自分の関心を誠実に追い続けてきた足跡でもある。たとえば、本書でも詳述するように、初期の代表作である『日の名残り』(*The Remains of the Day*, 1989) は、それまでの二作品でも展開されていたテーマが別の形で掘りさげられたものであることをインタビューで

明らかにしており、批評家の中にはそれらを「非公式の三部作」(informal trilogy)と呼ぶ者もいる⁽¹⁾。小説家の村上春樹⁽²⁾はイシグロの作品世界について、「個々の作品がそれぞれにまわりにある他の作品を補完し、支えている」と形容して、そのようなスタイルで創作を続けるイシグロを、礼拝堂の天井や壁に巨大な絵を描く画家になぞらえる。それが孤独で時間もかかる、消耗も激しい「一生仕事」だとして、次のように続ける。

そして彼はその一部を描き上げるたびに、何年かに一度、我々にその完成された部分を公開する。そして我々は彼の宇宙のより広がった領域を、段階的に同時進行的に眺望することになる。それはスリリングな体験であり、同時にきわめて内省的な体験でもある。しかし我々はまだその全体像を俯瞰^{ふかん}してはいない。そこに最終的^{さいしゅうてき}にどのようなイメージが現れるのか、それがどのような感動や興奮を我々にもたらすことになるのか、知るべくもない。(二九四)

これは二〇一〇年に出版されたイシグロについての英語論集⁽³⁾に寄せられた序文(元の日本語文は一足早く二〇〇八年に発表)であるが、村上の提示するイシグロの作品世界のイメージは現在においても有効だろう。その後、『忘れられた巨人』(二〇一五年)と『クララとお日さま』(二〇二一年)が発表されて我々を驚かせ、心を動かし続けている。

本書の目的と構成

本書はカズオ・イシグロの作品をいくつか読んだことがある、あるいはその名前は聞いたことがあるがこれから読んでみるという方から、原著でもすべて読破している方、また「読んでみたけど、何が面白いのか分からなかった」という方までを対象に、個々の作品だけではなく、それらを生み出すイシグロの思索の土壌ともいえる要素にも眼を向けてゆきたいと思っている。本書の主要な記述は網羅的な研究書というよりも広く一般向けのものを目指しており、各読者がイシグロ作品の世界に分け入って、新たな発見を得るためのガイドとなるように構成されている。それとともに、いわゆる文学研究に携わる方々（学生や大学院生たち）にも使えそうな国内外の基本文献+ α も紹介しているのでご活用いただきたい。また本書の末尾では今後のイシグロ研究の方向性についての印象も記せればと思う。

- (1) Barry Lewis, *Kazuo Ishiguro*, Manchester: UP, 2000, p. 133.
- (2) 村上春樹「カズオ・イシグロのような同時代作家を持つこと」、『雑文集』新潮社、二〇一一年、二九二―二九五頁。また、このフリーズの紹介から始まる日吉信貴『カズオ・イシグロ入門』（立東舎、二〇一七年）は、イシグロのノーベル文学賞受賞発表後間を置かず出版されたイシグロへの親切的な導入となっている。なお、以下、引用文の末尾に付した数字は引用元の頁数を示す。
- (3) Sean Mathews and Sebastian Groes (editors), *Kazuo Ishiguro: Contemporary Critical Perspectives*, Continuum, 2009.

まず第Ⅰ部では彼の個々の長篇作品を出版年順に解題しながら、それらの中で繰り返される中心的なテーマを検証するとともに作品同士の関連性も確認する。まず①では『遠い山なみの光』で反復される、得体の知れない「川向こうの女」というモチーフに注目することで、作品の主要な主題が変奏されながら多層的に重ね合わせられる、以降の作品でも用いられる叙述手法を検証する。次に②では『浮世の画家』の主人公小野益次が画家として成長してゆく過程での「裏切り」を取り上げて、彼の変節という物語上の主題に、叙述上の断絶と断片化が結びつけられていることを明らかにする。続く③では、初期の代表作『日の名残り』の執事ステイブンスが、雇い主やイギリスの景観の「偉大さ」に託して自分の立場を保障しようとする叙述に着目する。またイシグロの代名詞となった（そして後にはそこからの離脱を試みた）「信頼できない語り」(unreliable narration)についても概観する。

また④は、それまでの作品とはまったく異なる雰囲気をもたらえる『充たされざる者』での時間と空間の感覚の表象を検証する。日本でもイギリスでもないヨーロッパの町を舞台に展開される夢の中のような叙述は、当初はイシグロの転向と見なされることもあったが、それまでの作品とその後との展開をつなぐ、実に「イシグロらしい」作品であることが実感できるだろう。そして⑤では『わたしたちが孤児だったころ』を取り上げる。イシグロが探偵小説という特定の「ジャンル」の要素を取り入れたものとして話題になったが、作品を駆動する原理はやはりイシグロに特徴的なもので、「拡大鏡」といった探偵に典型的なアイテムにもそれが反映されている。

さらに⑥ではSF的な体裁で描かれる『わたしを離さないで』に焦点を当てる。臓器移植のため

に生み出されたクローンを主人公としながらも、彼らが頻繁に想起する幸福だった過去へのノスタルジアは読者である我々にも十分共感できるもので、彼らのほとんどが三〇代で命を終えてしまう運命だからこそより強く訴えかけてくる。続く⑦で扱う『忘れられた巨人』はアーサー王が亡くなった後の六世紀イングランドを舞台とするファンタジー仕立ての物語だが、忘却の霧に覆われた世界で人物たちが各々の過去を想起して取り戻してゆくプロセスは、それまでの作品群にも連なるものである。本章では彼らが渡ることになる「島」をめぐる問いかけをとば口として、この茫漠とした世界が依って立つ記憶観を素描する。

なお、現段階（二〇二二年）での最新作『クララとお日さま』についてはインタビューや短い書評は出ているものの、本格的な論考はこれからである。現状では作品を未読の方も多いことを考慮し、本書では第Ⅰ部の付論（⑧）として、それまでの作品のテーマとの関連性を整理することを中心とする。その上で、この作品が新たに切り開いている領野についても検討したい。

本書において分析のきっかけとして着目する場面は、必ずしも作品内で目立つものとは限らないが、イシグロ作品では一見些末な要素がその後に表示される重要な出来事の兆候となることも多い。それらは『日の名残り』のある人物の言葉を借りるなら、「その意味するところの重大さ」（八二二）をしばしば秘めているのである。

第Ⅱ部は「モチーフ編」として、イシグロの作品でしばしば見かけられる要素、および彼の生い立ちや発言から重要と思われるキーワードを取り上げる。こうした要素は一つの作品全体を貫くほど強力なものではないかもしれないが、複数の作品にわたって登場して作品同士を有機的に関連づ

けている。これは作家において珍しいことではないが、特にイシグロのようなタイプの小説家にとっては、その全体像をとらえるためのステップとなってくれるだろう。第Ⅱ部のいくつかの項目では、第Ⅰ部で取り上げていない短篇集『夜想曲集』にも触れている。

一九五四年に長崎で生まれ、五歳でイギリスに渡ったイシグロにとつては、日本という「家郷」の記憶とそこに対する憧憬が大切にされ、日本とイギリスの「二世界」に属することが主要な関心となつてゐることは想像に難くない。それに伴つて、「幽霊」など日本的な要素が作品に取り入れられてゐることが目を引くが、そのような実在と不在との合間にたゆたう境界性は、見える（可視）と見えない（不可視）の区分だけでなく、直接は見えない内面を間接的に見せる暗示的な「アート（技術と芸術）」の問題にもつながつてゐる。それ以外にも、「動物」や「乗物」、あるいは川や海、滝などの「水」といった物語上の具体的な道具立てに目を向けてみれば、彼が作品を展開してゆく手癖を垣間見ることができらるだろう。

日本で過ごした後にはヨーロッパの文化圏に暮らすようになったイシグロにとつて、「原爆」やホロコーストおよび戦争をめぐる記憶の継承の問題は作品の表側には現れてこないものの、その世界を構築する重要な動因となつてゐる。それは、記憶を集合的に共有して後の世代へと受け渡す装置（媒体）としての「記念碑」の問題につながつてゐる。また彼の重要な特徴である、一人称の限定された「視野」^{パースペクティブ}にもとづく叙述は、必然的に、その外側にある、語り手自身のものとは異なる「価値観」や世界を暗示する構造にもなつてゐる。それはしばしば、両者の間での格差を喚起し、我々が社会生活を送る上で避けては通れない「悪」の問題ともつながつてゐる。語り手たちがそう

した構図の中で翻弄され、搾取されるだけでなく、時にはその構造の維持に加担してしまう可能性すら存在することをイシグロは冷静に書き込んでおり、読者自身の共感や「気づかい」のあり様を見直すよう促しているのである。

本書で提示する読み方は多彩なイシグロ小説の可能性のごく一部にすぎないが、読者各氏にとってイシグロの作品世界のイメージをより鮮明に、そしてより広範なものとする一助となってくれるなら、これほどうれしいことはない。